

# うひはたぶみ (初機踏)

H.A.M.A.木綿庵だより  
第10号  
2017(平成29)年10月26日  
(編集発行 梅田正之 090-5042-7775)

## むやみに糸を紡いでも — 大事なのは明確な目的 —

糸の太さを示す単位には大きく分けて恒重式と恒長式があります。恒重式の単位は「番手」と呼ばれ、「番手」の中にも綿番手と毛番手があります。綿番手は重さ1ポンド(453.6g)で長さが840ヤード(768.1m)の糸を1番手と言い、毛番手は重さ1,000gで長さが1,000mあるものを1番手と言います。※平凡社『大百科事典』(1984年発行)第1巻1106頁「糸の太さ」参照

恒重式では、一定の重さ(恒重)に対して長さがいくらあるかという、重さと長さの相関関係で示されるため、綿番手では、1ポンドで8,400ヤードあれば10番手となります。また、毛番手では、1,000gで10,000mあれば10番手となります。つまり、番手数が大きいほど糸は細くなります。

ちなみに、恒長式では一定の長さに対して重さがいくらあるかで糸の太さを表すため、数字が大きくなるほど糸は太くなります。恒長式の単位はデニールと呼びます。

木綿糸の太さは、綿番手で表します。したがって、数字が大きくなるほど糸は細くなります。落ち着いて考えれば迷うことはないのですが、ついうっかりすると、混乱してしまいます。

「木綿糸 → 恒重式 → 一定の重さに対する長さ → 長いほど細い → 数字が大きいほど細い」  
この関係を忘れないようにしたいと思います。

実際に機織りの現場で用いられる紡績糸は、たとえば「20/1」、「30/2」、「40/3」のように表示されます。「ニマル・タンシ」、「サンマル・フタコ(ソウシ)」、「ヨンマル・ミコ」などと読みます。20、30、40は番手を表し、「/1」「/2」「/3」は、撚りの本数を示しています。つまり、「20/1」は20番手の単糸であることを表し、「30/2」は、30番手の糸を2本撚り合わせた糸(双糸)であることを表しています。市販されている木綿のタコ糸などは、強度を増すために4本撚り、5本撚りした「10/4」「20/5」などが用いられています。

ところで、私はできるだけ毎朝、たとえわずかな時間でも糸車の前に座って糸を紡ぐようにしていますが、あるていど糸を紡ぐことができるようになってくると、自分が紡いでいる糸の太さや撚り加減が気になってきました。手紡ぎの糸で機を織るには、どの程度の太さ、撚りの強さが適当であるのか、ということです。緯糸(よこいと)はもちろん、経糸(たていと)も自分の手紡ぎ糸を用いるとして、どの程度の糸の太さ、強さが理想的であるのか、ということです。

そこで、過日、『弓浜絣展』でご縁をいただいた伝統工芸士の南家敦美先生にお尋ねさせていただきました。すると、即座に以下のような回答をいただきました。「なるほど。むべなるかな！」です。

「そもそも、手紡ぎにおいて、理想的な正しい糸の太さや撚り加減というものがあるわけではありません。あなたは、どのような布を織りたいと思っていられるの？ それに応じて、それに相応しい太さ、撚りの強さの糸を紡げばいいだけです。大事なのは明確な目的です。目的が曖昧なまま、むやみに糸を紡いでもねえ。」と。写真は、『弓浜絣展』における反物展示の様子 →



### ----- Monthly Data -----

【天理やまのべ木綿庵】(問い合わせ件数 平成29年9月26日～平成29年10月25日)

福島県1、栃木県2、東京都2、神奈川県2、石川県1、愛知県3、滋賀県1、奈良県1、長崎県1

【H.A.M.A.木綿庵】(平成29年9月26日～平成29年10月25日)

メールを含む各種相談件数5、綿畑や作業場の見学を兼ねた事前申込済来庵者数1件1名



## 〈弓浜絣展 — 弓浜絣と伯州綿、を訪ねて〉

昨秋10月29日、『弓浜絣展—弓浜絣と伯州綿』を初めて訪ねました。会場は大阪駅前第3ビルです。弓浜絣の反物をはじめ、小物なども展示即売する一方、弓浜絣を紹介するビデオの放映や、手紡ぎの体験コーナーもありました。そして、その会場で手紡ぎについての的確なアドバイスを下さったのが南家敦美先生でした。後日、鳥取県境港市にある先生の工房「南家織物」をお訪ねし、じんきの作り方、総上げの方法をはじめ、細部にわたり丁寧にご指導をいただきました。南家先生は弓浜絣の伝統を受け継ぐ伝統工芸士のお一人です。手紡ぎ、機織りのプロフェッショナルとして活躍されています。写真左：伯州綿栽培地、中：南家敦美氏と、右：嶋田悦子氏と。いずれもH28.11.27境港市にて



昨年の平成28年11月27日に境港市を訪ねた際、空いた時間を利用してブラリと立ち寄らせていただいた工房が「工房ゆみはま」でした。日曜日午前中の突然の訪問ということもあり、工房におられたのはご高齢のご婦人お一人だけでした。来意を告げるととても喜んでくださり、弓浜絣復興にまつわるお話を聞かせていただくことができました。別れ際にお名前をお尋ねすると「嶋田悦子です」と。弓浜絣を復興させた中心人物のお一人でいらしたことは、その後になりました。

一度途絶えてしまった伝統を再興しようとする取り組みの陰には、いつもワクワクするようなドラマがあります。そしてそれは多くの場合、志あるところに、奇跡的とも言えるような人と人、人とモノとの出会いによって紡がれていくものであることを教えていただいたような気がします。

### 【綿の加工の作業記録】（梅田1人の作業量）

・糸車を用いての糸紡ぎ量（洋綿）

9月26日～10月25日（作業実日数15日） 糸の総量50.5g（13.47匁） 総時間171分（2時間51分）

※1分間≒0.295g 1時間≒17.7g（4.7匁）

### 【研修等の記録】

- ・平成29年10月01日「相楽木綿伝承館：機織り教室中級④巻き取り」（京都府相楽郡精華町）受講
- ・平成29年10月07日「弓浜絣展—弓浜絣と伯州綿—」（大阪駅前3ビル）訪問、見学
- ・平成29年10月14日「全国子ども若者支援フォーラムin Osaka」（大阪府豊中市）参加、受講
- ・平成29年10月15日「相楽木綿伝承館：機織り教室中級⑤綜統通し」（京都府相楽郡精華町）受講
- ・平成29年10月17日「生駒市適応指導教室ワークショップ—糸を紡ごう—」（奈良県生駒市）講師
- ・平成29年10月21日「斎藤洋の染—風布展染」（奈良県宇陀市向瀬：ギャラリー夢雲）訪問、見学

### 【以下の写真は、相楽木綿伝承館での糸綜統通しの様子と、ギャラリー夢雲の入口正面の展示】

